

青森県埋蔵文化財調査報告書 第355集

# 十三湊遺跡VIII

第151次～第154次発掘調査概報



平成14年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第355集

# 十三湊遺跡VIII

第151次～第154次発掘調査概報

平成14年度

青森県教育委員会

# 序

十三湊遺跡は北日本を代表する全国でも有数の中世港湾都市遺跡として推定されていましたが、これまでは文献資料も少なく、十三湊遺跡を拠点に活躍したとされる安藤氏とともに謎に包まれていました。

しかし、1991年から1993年の3年にわたる国立歴史民俗博物館の調査によって、十三湊遺跡が大規模な都市計画をもった中世の港町であることが分かってきました。

このように、十三湊遺跡は日本の中世史を解明する上で重要な遺跡であることから、青森県では遺跡の早期の実態解明を目指し、平成7年度から地元の市浦村と協力して発掘調査を行い、遺跡の全体構造の把握に努めており、今年で8年目を迎えました。

本年度は、遺跡南端部に位置する隠居地点(伝檀林寺)と呼ばれる寺院跡に推定されている場所と、遺跡中央の土塁南側に位置する宗教施設地区の2ヶ所で発掘調査を実施しました。隠居地点(伝檀林寺)では、土塁跡や墳墓などが確認され、大規模な施設があったことが分かりました。

十三湊遺跡の発掘調査成果が今後各方面の研究に活用され、また、地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護意識の高揚につながることを期待します。

最後になりましたが、平素より埋蔵文化財の保護に対し御理解と御協力を賜っている市浦村教育委員会、また、発掘調査の実施と報告書の作成に当たり御指導、御協力を賜りました関係各位に対して、心から感謝の意を表します。

平成15年3月

青森県教育委員会

教育長

花田 隆則

# 例 言

- 1 本報告書は、青森県教育委員会が平成14年度に国庫補助金事業として発掘調査を実施した市浦村大字十三所在の十三湊遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は、青森県教育庁文化財保護課埋蔵文化財班が編集・作成した。
- 3 本報告書の遺跡登録番号は、38022番である。
- 4 本報告書の執筆者名は文末に記してある。
- 5 挿図の縮尺は図版ごとにスケールを付してある。
- 6 土層の色調については、『新版・標準土色帳』（農林水産技術会議事務局1995年）を使用した。
- 7 出土遺物・記録書類は、青森県教育庁文化財保護課が保管している。
- 8 遺構の表示記録は、以下の記号を用いた。  
S D：溝、S K：土坑、S B：掘立柱建物、S A：柵、S P：柱穴、S I：竪穴遺構、  
S E：井戸、S X：不明遺構
- 9 発掘調査及び本報告書作成にあたって、下記の関係機関・各位から御協力・御指導を得た。深く感謝の意を表す次第である。（敬称略・順不同）  
文化庁、国立歴史民俗博物館、市浦村、市浦村教育委員会、千田嘉博、  
中央大学文学部史学科日本史専攻前川要ゼミ
- 10 第151次発掘調査は、青森県教育委員会と市浦村教育委員会が発掘調査を実施した。本報告書には、市浦村教育委員会の調査結果も合わせて掲載した。151次調査区全体の調査成果については、青森県教育委員会と市浦村教育委員会の合議によるものである。  
また、調査区周辺の地形測量図の作成にあたっては、中央大学文学部史学科日本史専攻前川要ゼミの協力を得ている。

# 目 次

序	
例 言	
目 次	
第 章 はじめに.....	1
第 1 節 調査に至る経過とこれまでの調査成果 .....	1
第 2 節 調査要項.....	2
第 章 第151次調査区の概要 .....	4
第 1 節 調査前の知見と調査の目的 .....	4
第 2 節 検出遺構と出土遺物 .....	5
第 3 節 調査成果と今後の課題 .....	6
第 章 第152次～第154次調査区の概要 .....	10
第 1 節 調査の目的と方法 .....	10
第 2 節 第152次調査区 .....	10
第 3 節 第153次調査区 .....	11
第 4 節 第154次調査区 .....	11
第 章 山王坊遺跡の調査の概要 .....	14
第 1 節 調査の目的と方法 .....	14
第 2 節 調査の概要 .....	14
引用・参考文献 .....	16
写真図版.....	17
報告書抄録 .....	23

# 第 章 はじめに

## 第 1 節 調査に至る経過とこれまでの調査成果

十三湊遺跡は、1991年から1993年にかけて行われた国立歴史民俗博物館の調査を契機として、中世都市の地割を今に残す日本中世史上極めて重要な遺跡であることが明らかになった。このため、地元市浦村教育委員会では、平成5年度に「遺跡整備検討委員会」を発足し、平成6年度より調査・研究を進めている。

青森県教育委員会では、平成6年度に大規模・重要遺跡調査研究を行い、国立歴史民俗博物館が作成した十三湊遺跡想定復元図に基づいて、6ヵ年の発掘調査計画を作成した。年度ごとの調査成果を踏まえて、一部計画変更を行いながら平成7年度から継続して調査を進めている。また、市浦村教育委員会が安藤氏館跡と推定されている地区周辺の調査を行い、青森県教育委員会が武家屋敷群、町屋、港湾施設、宗教施設などに推定されている地区周辺の調査を行い、県と村が役割分担しながら調査を進めてきた。

これまでの発掘調査では、安藤氏館とその周辺地区、武家屋敷群地区、町屋地区である程度面的な調査が実施されている。安藤氏館や武家屋敷地区では、柵塀や溝で区画された屋敷割りが確認されており、掘立柱建物や井戸、土坑を配置している様子が明らかになってきている。町屋地区では中軸街路に面して屋敷が建ち並ぶ様子や、町屋のはずれに墓域が広がる場所や畑があったことなどが明らかになってきている。港湾施設地区では、前潟に面した場所で南北約200mに渡って港が整備されていたことが確認されており、荷揚場や船着場と考えられる遺構も検出されている。これらの地区については、現在本報告書の作成に伴って、遺構の変遷や出土遺物などについての整理検討が進められているところである。

このように遺跡全体の中での地区ごとの性格や年代観が徐々に明らかになりつつある中で、十三湊の南の出入り口という重要な場所に位置し、寺院跡に推定される隠居地点（伝檀林寺）と呼ばれる場所については、その性格や範囲が特定されておらず、遺跡の全体構造や遺跡の範囲確認のためにも試掘調査を実施することとなった。

また、土塁南側に位置する湊迎寺や願龍寺周辺では、これまでの発掘調査でコの字に巡る溝跡や土坑墓などが多数検出されており、墓域として使用されていた可能性が高いと考えられる。しかしこれらの墓域に伴う寺院などの明確な宗教施設は確認されておらず、墓域に隣接して寺院などの施設が存在したかどうかの確認、あるいは隣接する町屋地区との関係を把握する必要もあり、13年度に引き続き発掘調査を実施した。

（鈴木 和子）

## 第2節 調査要項

### 1 調査目的

日本中世史解明の上で極めて重要、かつ大規模な十三湊遺跡の早期の国史跡指定を目指し、発掘調査を実施し、遺跡の範囲・性格等を明らかにする。

### 2 調査期間

平成14年6月3日～同年8月2日まで

### 3 遺跡名及び所在地

十三湊遺跡 青森県北津軽郡市浦村大字十三

### 4 発掘調査面積

約904m<sup>2</sup>

### 5 調査担当機関

青森県教育庁文化財保護課

### 6 調査協力機関

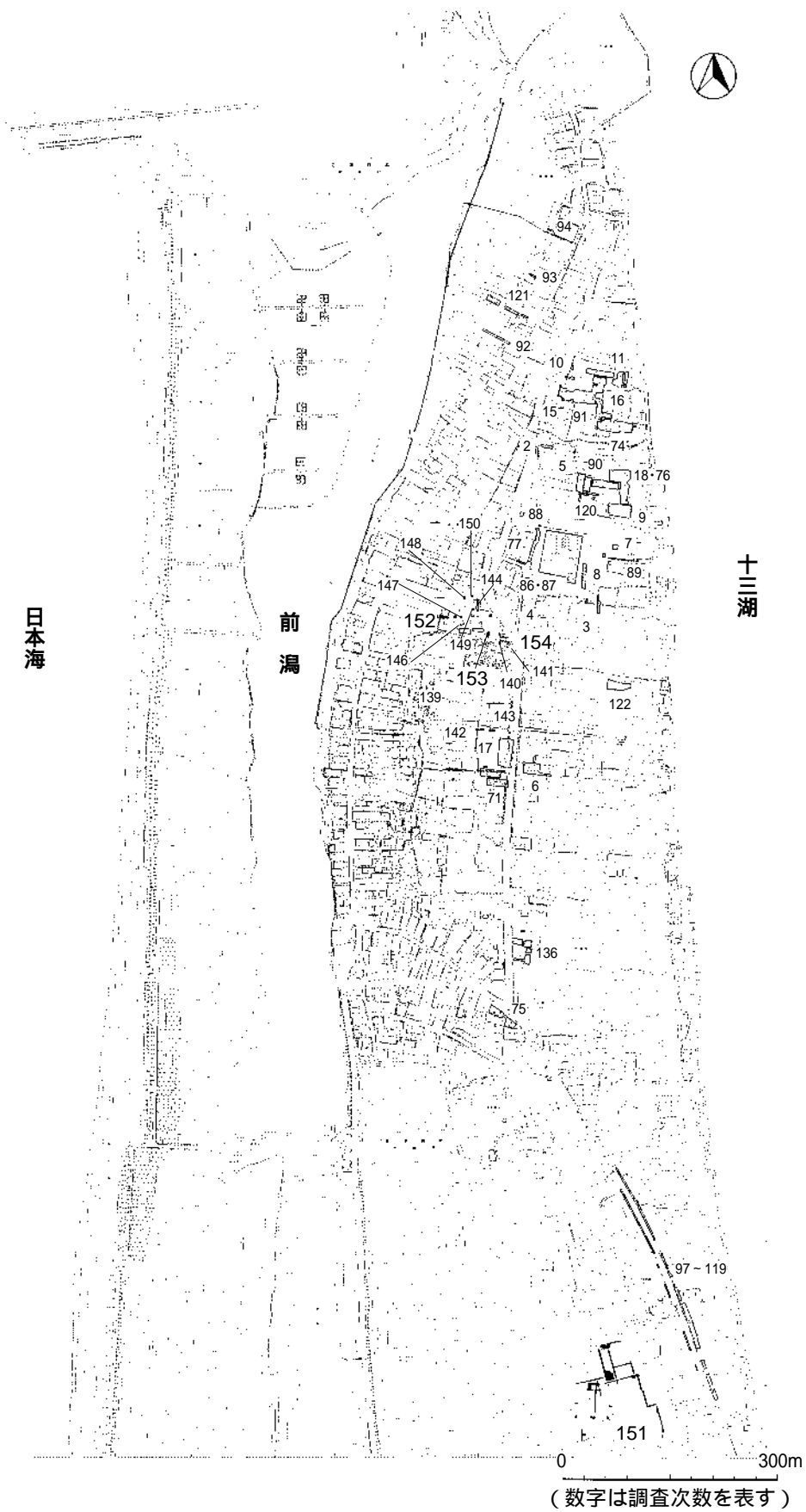
市浦村教育委員会

### 7 調査参加者

調査指導員	村越 潔	青森大学教授（考古学）
調査協力員	木村 義光	市浦村教育委員会教育長
調査員	佐藤 仁	青森県文化財審議委員会委員（歴史学）
	高島 成侑	八戸工業大学教授（建築史）
	山口 義伸	青森県史編さん室総括主幹（地質学）
	鈴木 三男	東北大学大学院理学研究科教授（植物学）
	前川 要	中央大学文学部教授（考古学）
	酒井 英男	富山大学理学部教授（地球科学）
	小野 正敏	国立歴史民俗博物館助教授（考古学）
	小島 道裕	国立歴史民俗博物館助教授（歴史学）

調査担当者 青森県教育庁文化財保護課

班 長	工藤 大
文化財保護主査	能代谷征則
文化財保護主査	工藤由美子
文化財保護主事	神 康夫
文化財保護主事	鈴木 和子
文化財保護主事	工藤 忍
調査補助員	弦巻 由美
調査補助員	伊丸岡政彦



第1図 調査区位置図



# 第 章 第151次調査区の概要

## 第 1 節 調査前の知見と調査の目的

### (1) 調査前の知見

本調査区は、十三湊遺跡の南端に位置する。古くから五輪塔や磚仏、礎石、金銅製飾り金具、炭化米などが発見されており、寺院跡として認識されてきた。現在記録に残っているところでは、遺物の出土は明治25年頃まで遡ることができる。

また、この地域一帯には十三藤原氏に関する伝承が残っており、古くから「隠居跡」あるいは「檀林寺」と呼ばれてきた場所でもある。本稿では隠居地点（伝檀林寺）として呼称する。

これまでに行われた発掘調査事例をみると、昭和51年に行われた早稲田大学を中心とする研究グループが行った発掘調査では、礎石跡や配石、土塁などが確認されている。遺物は14世紀末～15世紀前半を主体とする日常雑器の他に青磁の器台や香炉、中国褐釉壺などの奢侈品が出土している。

平成12年度に青森県教育委員会が行った隣接部の発掘調査では、屋敷地を区画する溝や掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴、井戸跡が広範囲にわたって検出されており、面的に屋敷地が広がっている様子が確認されている。また、14世紀末～15世紀を主体とする日常雑器の他に、青磁の盤や古瀬戸の花瓶、茶臼などの奢侈品が出土している。

このように、これまで行われた発掘調査成果からは、寺院跡と想定されている地区およびその周辺は、年代的には14世紀末～15世紀前半を中心とすること、宗教遺物や奢侈品が出土しており寺院関連の施設の可能性が高いこと、周辺には面的に居住域が広がっていることなどが明らかになってきている。しかし、その範囲や性格については特定できておらず、今年度試掘調査を実施することとした。

### (2) 調査の目的

試掘調査では、隠居地点（伝檀林寺）の範囲と性格を明らかにすること、遺構の性格と年代を抑えること、地形測量図を作成すること、今回の調査成果を踏まえ、過去に行われた調査成果を再検討することを目的とした。

本調査区は現況で松林となっており、地形の把握が困難であったため、木伐採と草刈を行い、地形を把握した上でトレンチを設定して遺構・遺物の確認を行った。調査結果をみながら順次調査トレンチを増やしていった。トレンチ名は調査順に番号を付してある。

なお、今年度調査は試掘調査であり、来年度も試掘調査結果に基づき発掘調査を行う予定であるため、今回は調査区の全体的な概要報告に留めた。来年度以降の発掘調査成果を待って、改めてトレンチごとに遺構・遺物について詳細な調査成果報告をする予定である。

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### (1) 区画溝

調査区は現在忠魂碑が位置する調査区西側が標高約5.8mで最も高い場所となっており、そこから東にかけて緩斜面となっている。この最も標高が高い場所から、東西約50m、南北約65mの範囲を囲むと想定される区画溝(S D01)を検出した(1トレ・2トレ・12トレ~18トレ)。S D01の規模は幅約2.0m、深さ約1.2mであり、南側では地山を残した開口部を検出した(16トレ)。また、一部で溝を掘りあげた砂を溝内部に盛って平坦面を造成していることが明らかになった。

この区画溝で囲まれた内側では遺構や遺物をほとんど確認していないが、区画内北側でS D02を検出した。S D02で区画された内部はやや高まりをもった平坦面となっている。このS D02周辺では柱穴などの遺構も若干検出されており、S D01によって囲まれた区画の中心部と推測される。S D02は南側に開口した「コの字」型に巡っており、南面に向いた社殿が建立されていた可能性が高い。

### (2) 墳墓

調査区北側で、現況でマウンド状の高まりを確認した。3・4トレンチを設定したところ、円形に巡る周溝を伴ったマウンド状の高まりを検出した。マウンドは直径7.8m、周溝の最大幅は1.8mである。周溝から瓦質土器の火鉢あるいは風炉が出土していることから、15世紀前半代の墓と推測できる。

なお、今年度の調査では周溝の精査を行ったところで留め、主体部の確認、マウンドの断ち割り調査は行っていない。

### (3) 土塁

#### (土塁1)

3トレンチの東端で南北に延びる土塁1を確認し、断ち割り調査を実施した。この土塁1は早稲田大学で断ち割り調査を行っているが、年代観等は示されていなかった。土塁1の基底部分は幅4.5m、高さ75cmで、砂を丁寧に積み上げている。セクションで土塁上部から掘り込む布掘り溝を確認している。1トレンチと8トレンチで土塁延長線上に布掘り溝(S D03)を検出しており、土塁1が少なくとも1トレンチまでは延びており、さらに南方向へ延びていた可能性が高いと考えられる。

#### (土塁2)

11トレンチの南側では東西に延びる土塁2を確認し、断ち割り調査を実施している。土塁2の基底部分は幅4.5m以上、高さ1.0mを測る。土塁の南側にトレンチを延ばしたが、堀などの遺構は確認できなかった。土塁中位の砂層より信楽が1点出土している。基底部分から、浅い掘り込みをもつ溝が確認された。

### (4) 柱穴・井戸・土坑など

調査区は西側から東側に向かって緩斜面となっている。この平坦面上の1トレンチ東側と6・7、9~11トレンチでは、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴列や屋敷地の区画と考えられる区画溝、

竪穴遺構、井戸などを検出した。このことから土塁とS D03より東側の平坦面は、寺院に付属する生活域として使用されていたと考えられる。

このうち1トレンチのS K01からは、中国製天目茶碗、青磁碗・香炉、白磁小碗、珠洲すり鉢・壺、瓦質土器、鉄製品など多数の遺物が出土している。遺物の年代は、14世紀末～15世紀前半が主体である。

### 第3節 調査成果と今後の課題

#### (1) 調査成果

第151次調査区の試掘調査成果とこれまでに行われた檀林寺跡およびその周辺地区の発掘調査成果を合わせると、これまで寺院跡として認識されてきた場所は、土塁1の東側にあたる場所であり、今回の調査によってさらに西側にも遺構が広がることが確認できた。さらに南北に延びる土塁1を境界として、その西側と東側の大きく2つの異なった空間に分かれることが明らかとなった。

土塁1・S D03より西側の地区は土塁の外側の空間と認識できる。S D01によって区画された東西50m、南北65mの規模をもつ平坦面では遺構や遺物が少なく、隣接して墳墓（墳丘墓）が造成されるなど、宗教的空間であったと推定される。また、区画内にはS D02で囲まれた小区画が検出されており、社殿などの施設があった可能性が高いと考えられる。

一方、土塁1・S D03より東側の地区は、土塁1と土塁2によって囲まれた空間として認識できる。細かい屋敷割りや、井戸、竪穴遺構、掘立柱建物、土坑などの遺構を検出しており、日常生活に係わる居住空間であったと考えられる。このような遺構の様子は、第97次～第119次調査区（第1・3図）で確認されている遺構の様子と類似しており、面的に居住空間が広がっていたことがわかる。この土塁によって区画された空間は、北側と東側の土塁が残存していない現段階では、推測の域を出ないが、「檀林寺旧址研究図」に描かれている土塁の位置、あるいは今年度調査区と第97次～119次調査区の遺構が非常に類似していることなどから、南北に155～160mの規模があったものと考えられる（第3図）。

#### (2) 今後の課題

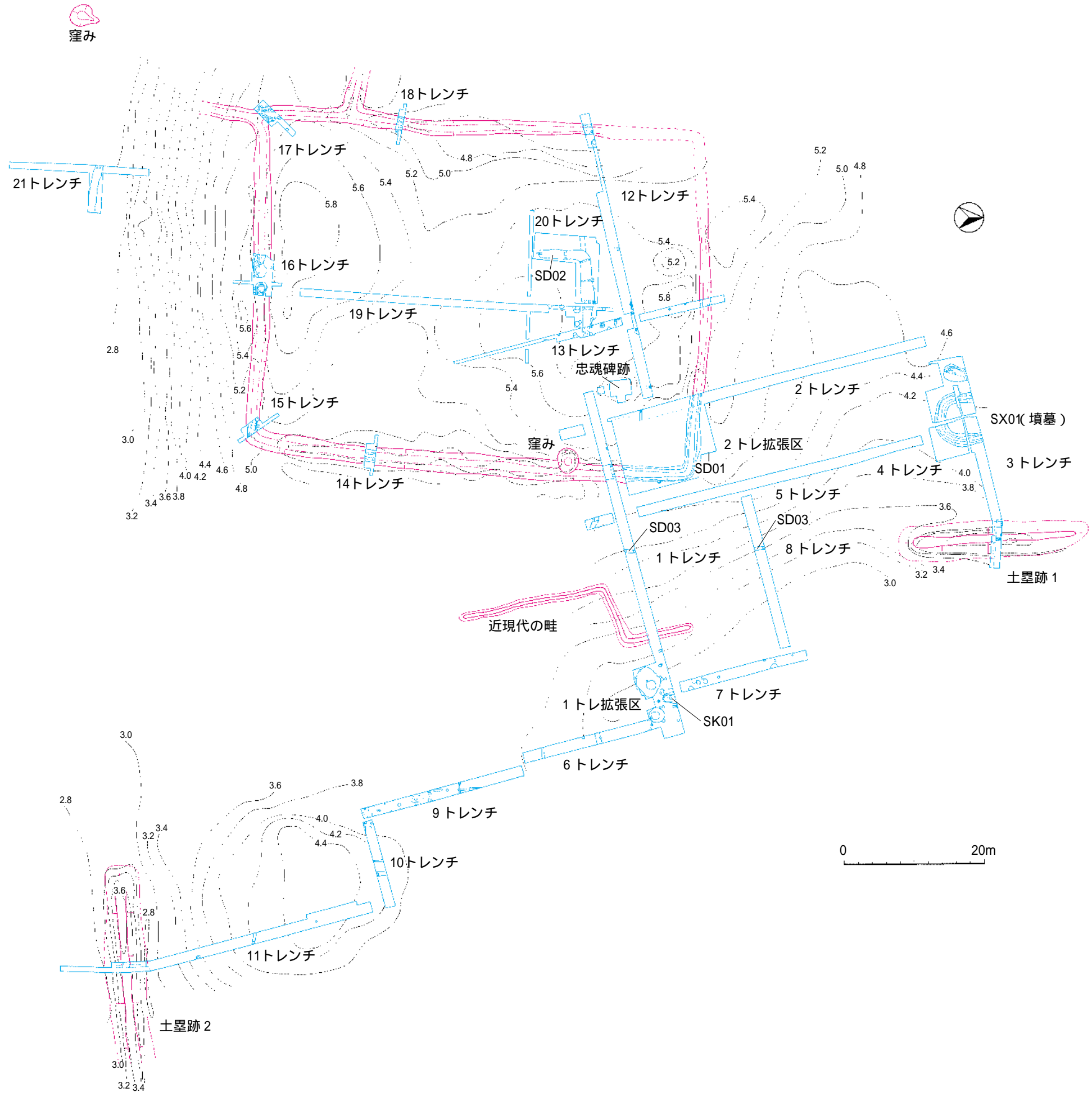
以上の調査成果を踏まえて、来年度以降に向けての問題点・課題を考えてみる。

まず、宗教的空間と位置付けた地区では、S D01で囲まれた区画の性格を明確にすることが必要である。そのためには、S D03内の調査が必要であると考えられる。

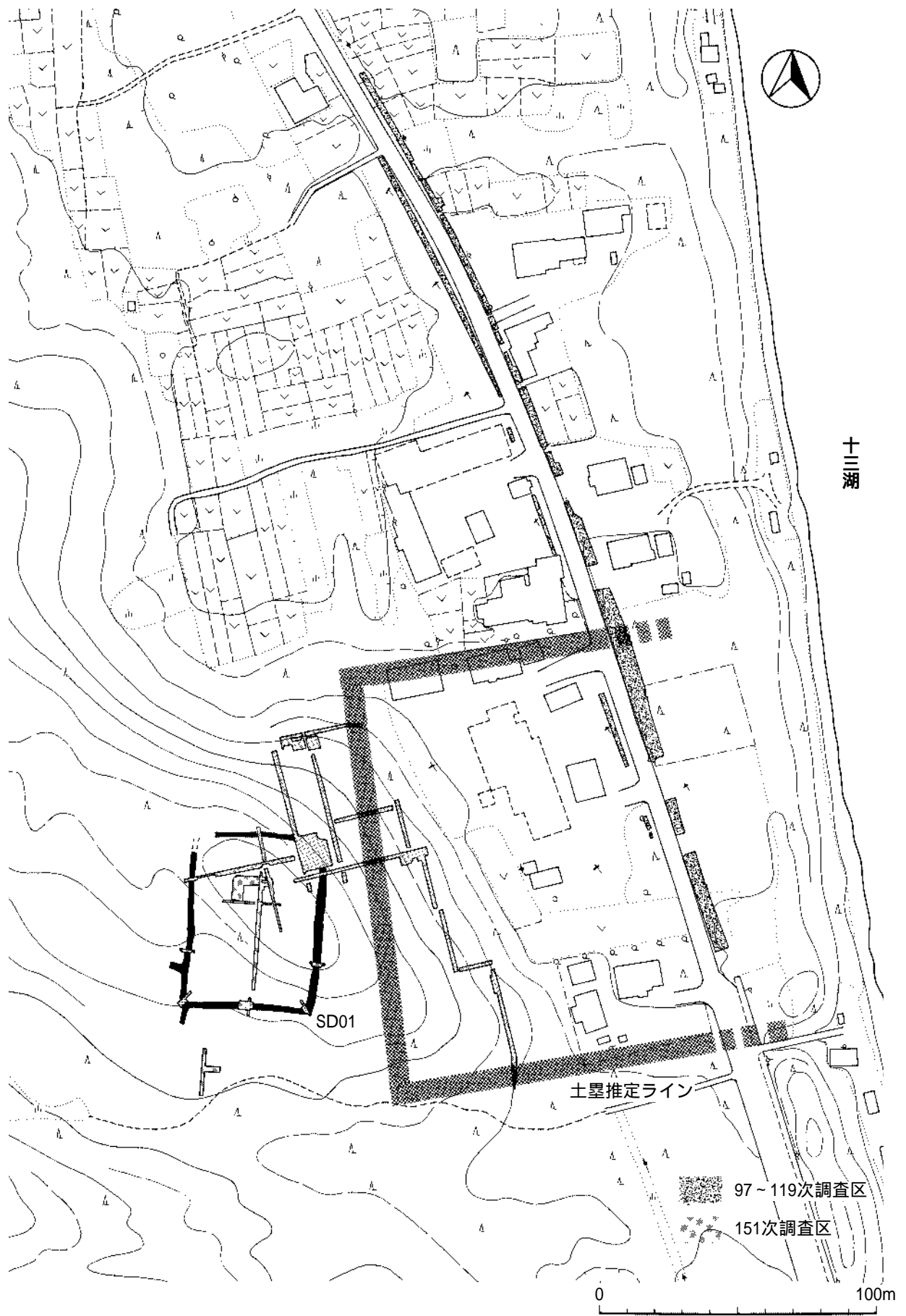
また、この区画への出入り口となるS D01の開口部が確認されているが、今後は、この出入り口へと通じる道路がどこへ通じていたかという問題も考えなければならない。この道路の問題に関しては、区画南側の急斜面下の平坦面の調査、あるいは宗教的空間と土塁で囲まれた生活空間との間の空間などの調査が必要であると考えられる。

土塁については、土塁1と土塁2のコーナーが残っているかどうかの確認調査が必要である。

また、今回の試掘調査から明らかになったことであるが、今回の調査区を含めた周辺地区は中世からの地形が極めて良好な状態で残存している。これまで松林となっていたため、詳細な分布調査が行われておらず、今後は実地に即した詳細な分布調査が必要であると考えられる。（鈴木 和子）



第2図 第151次調査区遺構配置図と周辺の地形測量図(縮尺1/600)



第3図 151次調査区と土壘推定ライン

# 第 章 第152次～第154次調査区の概要

## 第 1 節 調査の目的と方法

### 調査の目的

国立歴史民俗博物館が復元想定した宗教施設の様相を把握するため。

### 調査方法

発掘調査区は、第152次調査区（ $X = 73.2 \sim 73.4$ 、 $Y = 14.9 \sim 15.3$ ）第153次調査区（ $X = 72.6 \sim 72.9$ 、 $Y = 16.2 \sim 16.4$ ）第154次調査区（ $X = 72.5 \sim 73.0$ 、 $Y = 16.5 \sim 16.9$ ）の合計3箇所を設定した。いずれも国立歴史民俗博物館による想定復元図中の土塁に隣接する寺域の範囲を想定し、設定したものである。調査面積は第152次調査区は約56㎡、第153次調査区は約18㎡、第154次調査区は約30㎡である。

今年度の調査区域は狭隘なため、調査区両端に測量基本杭を設定し、それを基本に遺構実測を行った。その杭頭は後日国土座標測定を行い、室内整理段階にて十三湊遺跡都市グリッドを設定した。

調査は、調査区壁面で確認した基本層序に従って分層発掘を行った。粗掘り作業は人力で行い、遺構・遺物の検出に努めた。遺物の取り上げは、包含層出土遺物は簡易平板測量により、遺構内出土遺物は個別図面中に地点とレベルを落とし、取り上げた。遺構の実測は簡易遣り方法で行い、基本的に1/20縮尺で実測し、詳細箇所は1/10縮尺で実測した。

遺構の名称は種類ごとに付し、確認順あるいは調査手順に番号を付した。土層の名称は、基本層序については、表土から下位にローマ数字を付し、細分される土層はさらに小文字のアルファベットまたは算用数字を付加した。遺構内の堆積土については上位から下位に算用数字を付した。土層観察に当たっては、『新版標準土色帖』（小川正忠、竹原秀雄 1999）を用いた。

第152調査区・第153次調査区・第154次調査区は、調査区ごとの表記基本土層名は対応しておらず、遺構はすべて完掘している。第154次調査区は、中世の遺構確認を目的としたため、確認した遺構は完掘していない。写真撮影は適宜行うこととし、カラーリバーサル、カラーネガの2種類のフィルムを用いた。

## 第 2 節 第152次調査区

旧十三保育所の南に位置し、現在休耕地となっている地点である。遺構の検出は、第 a - 2 ~ c - 1 層、第 c - 3 ~ d 層、第 a 層（中世遺構確認）中に行った。検出した遺構はすべて完掘した。

### 1 基本層序（第4図）

第152次調査区では、基本土層は第 層から第 層まで区分している。上から順に第 層は暗褐色砂質土主体層（表土・耕作土）第 層は暗褐色砂質土・にぶい黄褐色砂質土主体層（近世相当）、第 層は黒褐色砂質土主体層（中世相当）、第 層は灰黄褐色砂（地山無遺物層）である。これら ~ 層に大分した基本土層は、さらに算用数字またはアルファベット小文字を用い細分している。

### 2 検出遺構（第4図）

本調査区で検出した中世遺構は、区画遺構2条、土坑2基、柱穴39基である。

区画遺構は、いずれも自然堆積により埋没しており、基本土層 e 層に被覆されていた。土層の

状態からは、流水の痕跡が確認できることから、溝跡の可能性が高い。

土坑も自然堆積により埋没しており、基本土層 e層に被覆されていた。平面形は楕円形を呈する。

井戸跡から遺物は出土せず、内部施設も残存しなかった。土層は人為堆積であり、内部施設の抜き取り後に埋めたものと思われる。

### 3 出土遺物(第5図)

本調査区の出土遺物は、発掘調査時で299点である。このうち、中世の遺物は遺物は44点であり、量的に少なく、また特筆すべき宗教的要素を持つ遺物は出土しなかった。

## 第3節 第153次調査区

湊迎寺の墓地北方に位置し、現在休耕地となっている地点である。遺構の検出は、第 a-3・4層、第 層上面で行った。検出した遺構はすべて完掘した。

### 1 基本層序(第4図)

第153次調査区では、基本土層は第 層から第 層まで区分している。上から順に第 層は黒褐色・暗褐色砂質土主体層(表土・耕作土)、第 層は暗褐色砂質土主体層(近世相当)、第 層は黒褐色砂質土主体層(中世相当)、第 層は黒色土主体層(中世相当)、第 層は灰黄褐色砂(地山無遺物層)である。これら ~ 層に大分した基本土層は、さらに算用数字またはアルファベット小文字を用いて細分している。

### 2 検出遺構(第4図)

本調査区で検出した中世遺構は、区画遺構1条、畑跡、柱穴12基である。

区画遺構は、自然堆積により埋没しており、基本土層 a-3層である飛砂に被覆されていた。幅1m程の規模であり、底面には凹凸が認められた。

畑跡は、基本土層第 層が畝を構成しており、a-3層により被覆されていた。

### 3 出土遺物(第5図)

遺物組成などの数量的把握は整理作業途中であるが、中世の遺物は量的に少なく、また特筆すべき宗教的要素を持つ遺物は出土しなかった。

## 第4節 第154次調査区

湊迎寺の墓地北方に位置し、現在休耕地となっている地点である。幅50cmのトレンチを5m間隔に設定し、遺構の分布状況を確認した。遺構の検出は、第140次調査区基本土層第 層で行った。

### 1 基本層序

平成13年度に調査した第140次・第141次調査区に隣接しているため、基本層序の把握は省略した。

### 2 検出遺構(第4図)

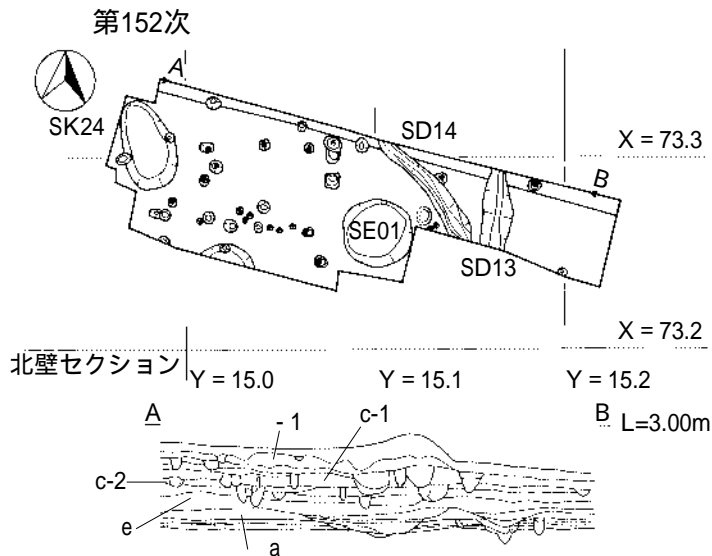
本調査区で検出した遺構は、区画遺構4条、柱穴28基である。

区画遺構は、推定中軸街路に平行に延びるものと、第153次調査区検出区画遺構と同一と思われるものがあり、後者は南方に向かってほぼ直角に折れ曲がるものである。

### 3 出土遺物(第5図)

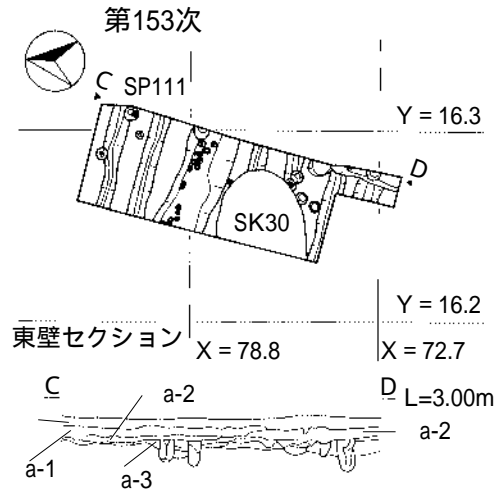
遺物組成などの数量的把握は整理作業途中であるが、中世の遺物は量的に少なく、また特筆すべき宗教的要素を持つ遺物は出土しなかった。

(工藤 忍)



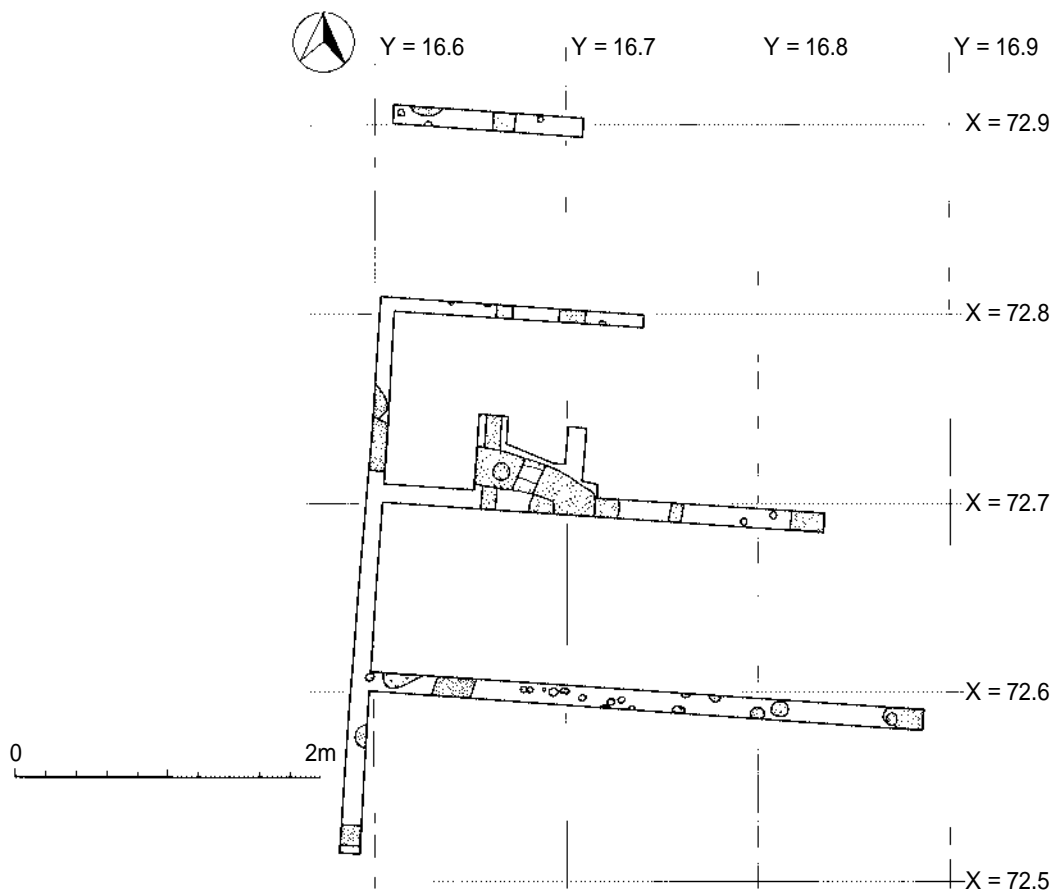
第152次調査区土層注記

層	10YR3/3	暗褐色砂	細-粗	ややハード	草木根	しまりなし	現代の攪乱層
a-1層	10YR3/4	暗褐色砂	細-粗	ややハード	草木根		現代の攪乱層
a-2層	10YR2/3	黒褐色砂質土	細-粗	ややハード			炭化物少量
b層	10YR4/3	にぶい黄褐色砂	細-粗	ややソフト			炭化物微量 (第1近位面)
c-1層	10YR3/3	暗褐色砂	細-粗	ややソフト			炭化物少量
c-2層	10YR4/4	褐色砂	細-粗	ややソフト			炭化物少量 (第2近位面)
d層	10YR4/3	にぶい黄褐色砂	細-粗	だが粗が優勢			特に層上部 ややソフト
e層	10YR4/4	褐色砂	細-粗	ややハード			
a層	10YR2/2	黒褐色砂質土	細-粗	ややハード			炭化物微量 3 - 5 cmの礫をわずかに含む
b層	7.5YR1.7/1	黒色砂質土	細-粗	ややハード			
c層	7.5YR2/2	黒褐色砂質土	細-中	ややハード			
d層	10YR1.7/1	黒色砂質土	細-中	ややハード			



第153次調査区土層注記

層	10YR2/2	黒褐色砂質土	細-粗	ややハード			生活廃棄物等混入
a-1層	10YR2/3	黒褐色砂質土	細-粗	ややハード			炭化物小塊少量
a-2層	10YR2/2	黒褐色砂質土	細-粗	ややソフト			炭化物小塊微量
a-3層	10YR4/3	にぶい黄褐色砂	細-粗	ややソフト			
a-4層	10YR2/3	黒褐色砂質土	細-粗	ややソフト			炭化物小塊微量
a-5層	10YR2/2	黒褐色砂質土	細-粗	ややソフト			炭化物微量

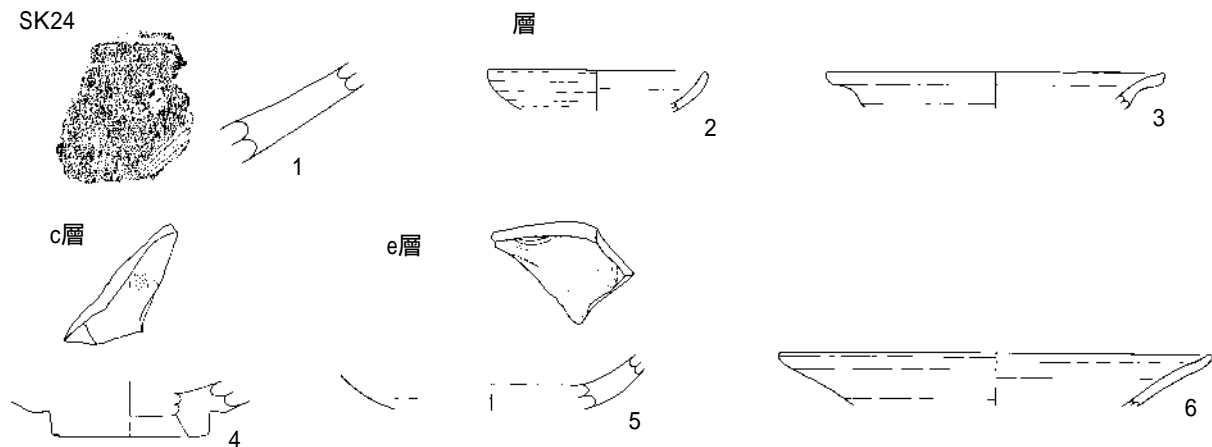


第4図 第152次・第153次・第154次調査区遺構平面図・セクション図



第152次調査区出土遺物

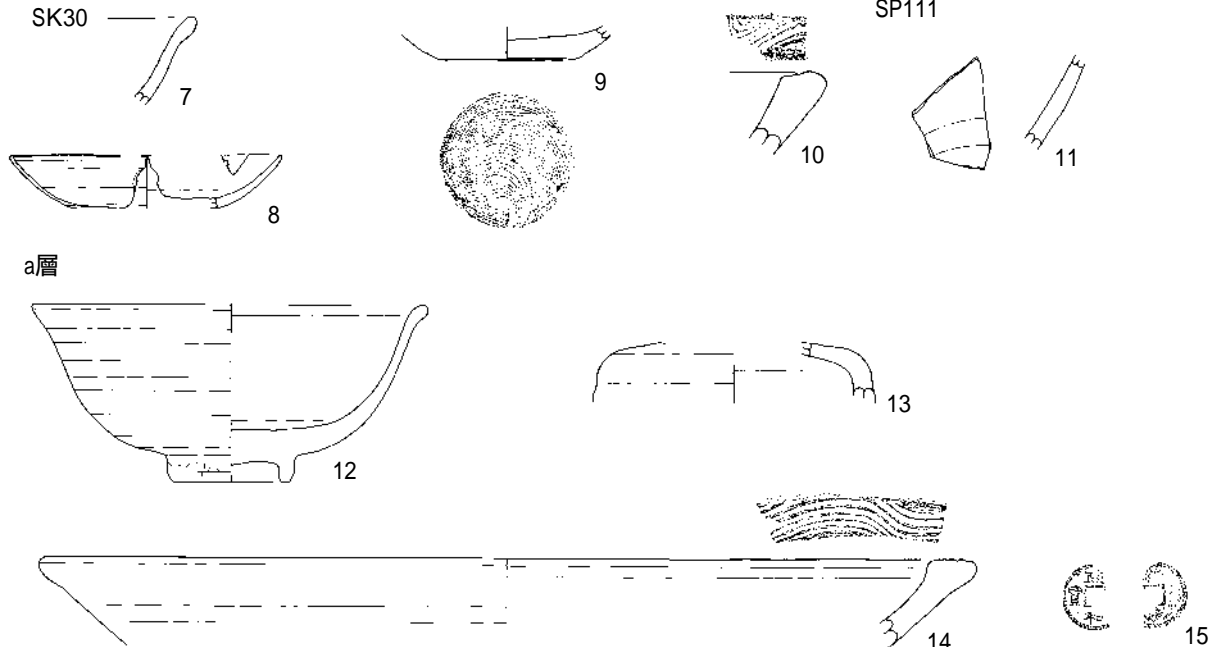
SK24



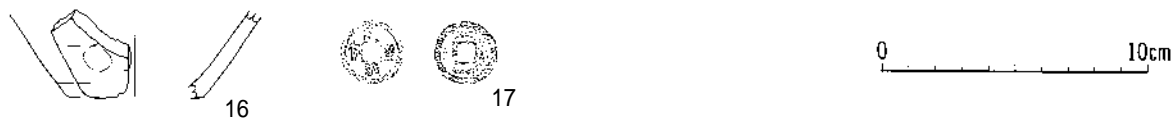
第153次調査区出土遺物

SK30

SP111



第154次調査区出土遺物



図版番号	整理番号	注記番号	出土位置	種類	器種	部位	出土層位	外面文様	分類	備考
1	1	AT2002-2-396	SK24	珠洲	擂り鉢	体部	覆土		～期	焼成良、胎土粗
2	18	AT2002-2-1146	a層	白磁	皿	口縁部			D群	焼成良、胎土密
3	12	AT2002-2-42	層		水注か	口縁部				焼成良、胎土密、二次被熱
4	13	AT2002-2-306	c層	白磁	碗	底部		見込み印花文	B群	焼成良、胎土密
5	14	AT2002-2-376	e層	青磁	皿	体部			龍泉窯系統類	焼成良、胎土密
6	19	AT2002-2-1317	排土	土器	かわらけ	口縁部-体部				ろくろ整形
7	3	AT2002-3-477	SK30	青磁	碗	口縁-体部	覆土		龍泉窯系統D-	焼成良、胎土密
8	7	AT2002-3-512/1519/1520/1521	SK30	白磁	皿	口縁-体部	覆土		D群	焼成良、胎土密
9	2	AT2002-3-474	SK30	古瀬戸	縁軸小皿	底部	覆土			焼成良、胎土密
10	6	AT2002-3-508	SK30	珠洲	擂り鉢	口縁	覆土	口唇部波状文	期	焼成良、胎土密
11	8	AT2002-3-495	SP111	古瀬戸	平碗	体部	不明		後～後期	焼成良、胎土密、二次被熱
12	25	AT2002-3-431・431-2/1454/1452/1456/1457/1460	a層	青磁	碗	口縁-底部				
13	21	AT2002-3-439	a層	珠洲	蓋	体部				焼成良、胎土密
14	20	AT2002-3-423	a層	珠洲	擂り鉢	口縁部-体部		口唇部波状文	期	焼成良、胎土密
15	27	AT2002-3-1513	排土	銭貨						政和通寶
16	30	AT2002-4-1606	第5トレンチ	古瀬戸	天目茶碗			漆接合痕	後期	焼成良、胎土密
17	28	AT2002-4-1589	第2トレンチ	銭貨						元豊通寶か

第5図 第152次・第153次・第154次調査区出土遺物

# 第 章 山王坊遺跡の調査概要

## 第 1 節 調査の目的と方法

### 調査の目的

市浦村相内地区に所在する、山王坊遺跡における宗教施設の範囲確認を行うため。

### 調査方法

発掘調査対象区の任意位置に、長辺 3 m、短辺 2 mの規模を中心としたトレンチを合計 8 箇所設定し、遺構や遺物の確認につとめた。調査面積は約59m<sup>2</sup>である。

標高値及び国土座標は、既存の土地測量用杭を基点とし、必要に応じて適宜移動して使用した。

各トレンチの位置は、調査時に国土座標を計測し、後日室内整理作業にて、図面上に設定する方法をとった。

粗掘り作業は人力で行い、遺構・遺物の検出に努めた。

写真撮影は適宜行うこととし、カラーリバーサル、カラーネガの 2 種類のフィルムを用いた。

## 第 2 節 調査の概要

### 1 基本層序

基本層序は、8 箇所設定したトレンチの壁面で確認した。いずれのトレンチも、地表下には黒褐色の腐植土層が 5 cmほど堆積していた。この腐植土直下には、白色またはクリーム色の泥岩起源と思われる土層が厚く堆積しており、円礫や角礫が板状に堆積していた。この土層は、粒子が非常に粗いことから、かつての山王坊川の旧河床と想定されるものである。湧水のため、地表下約 1 mの地点で確認を断念した。

### 2 検出遺構

検出されなかった。

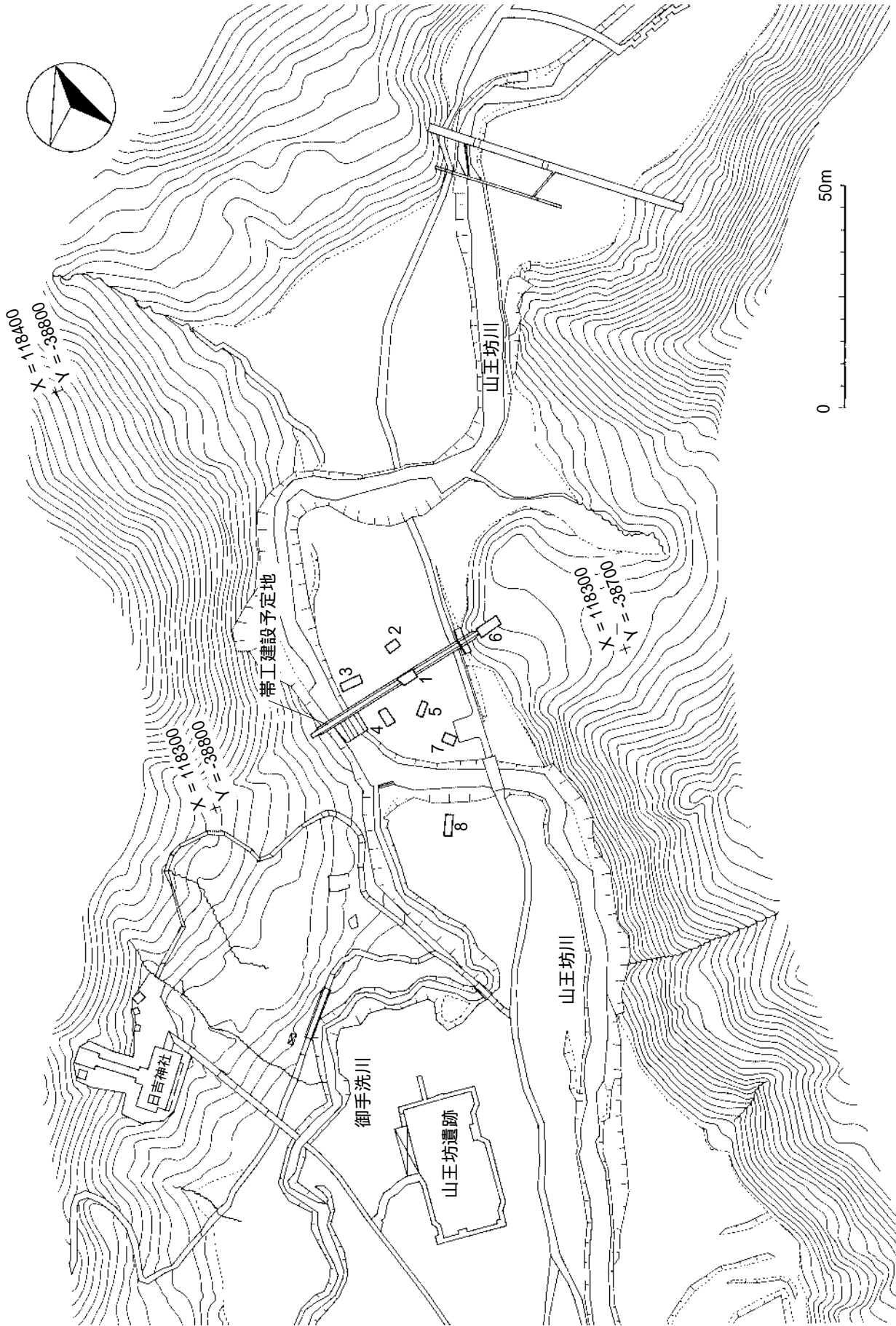
### 3 出土遺物

出土しなかった。

### 4 まとめ

調査対象地は、過去に東北学院大学により調査された山王坊遺跡からは北側へ約130mの地点であり、現在の日吉神社の西方に流れる山王坊川沿いの小平坦地である。調査前の知見では、谷地斜面を含めて、宗教施設の存在が予想されたが、今回の調査地点では新たな宗教施設の痕跡を認めることは出来なかった。今後の調査の進展に期待される。

(工藤 忍)



第6図 山王坊遺跡 概略図

## 引用・参考文献

豊島勝蔵 1984 「檀林寺遺跡」『市浦村史』第壹巻

桜井清彦他 1995 「十三湊遺跡隠居地点（いわゆる伝檀林寺跡）の調査」『青森県十三湊遺跡・福島城跡の研究』国立歴史民俗博物館研究報告書第64集

青森県教育委員会 2002 『十三湊遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第330号

斎藤利男 2002 「北の中世・書きかえられる十三湊と安藤氏」『東北学』vol. 7

# 写真図版



2 トレンチ拡張区SD01と平坦面検出（北から）



2 トレンチ拡張区SD01完掘（東から）



2 トレンチ拡張区SD01完掘（西から）



15 トレンチSD01完掘（南から）



17 トレンチSD01完掘（南から）



16 トレンチSD01開口部（西から）



20 トレンチ拡張区SD02検出（西から）

写真1 第151次調査区（1）



3・4 トレンチ墳墓 (SX01) 検出 (西から)



3・4 トレンチ墳墓周溝 (SX01) 完掘 (東から)



3 トレンチ土壘 1 セクション (南東から)



3 トレンチ土壘 1・布掘り溝 (SD03) (南から)



11 トレンチ土壘 2 セクション (北から)



11 トレンチ土壘 2 セクション (南から)



1 トレンチ拡張区遺構検出状況 (東から)



1 トレンチ拡張区SK01遺物出土状況 (南から)

写真2 第151次調査区(2)



1 トレンチ拡張区竪穴遺構検出（北から）



9 トレンチ遺構検出（北から）



1 トレンチ拡張区柱穴列（西から）



6 トレンチ遺構検出（北から）



7 トレンチ遺構検出（南から）



青磁 香炉



白磁 小碗・八角小坏・皿



中国褐釉壺（外面）



同左（内面）

写真3 第151次調査区（3）





青磁 盤・碗、中国製天目茶碗、かわらけ



古瀬戸 皿類ほか



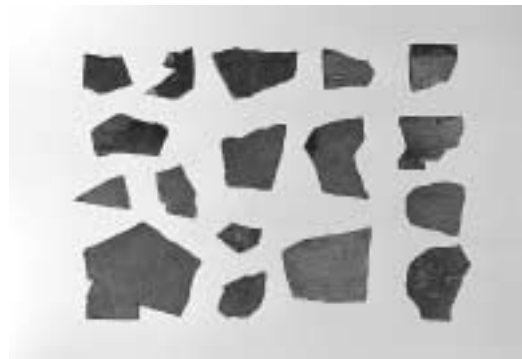
古瀬戸 皿類（外面）



同左（内面）



瓦質土器 火鉢・風炉



珠洲 すり鉢・壺・甕



珠洲 すり鉢・瓷器系陶器 甕



古銭（表）



同上（裏）

写真4 第151次調査区（4）



第152次調査区  
近世面遺構検出状況（西から）



第152次調査区  
中世遺構検出状況（西から）



第152次調査区  
中世遺構完掘（西から）



第152次調査区  
SD14セクション（北から）



第152次調査区  
SD13セクション（北から）



第152次調査区  
SD13・SD14完掘（北から）



第152次調査区  
SE01セクション（北から）



第152次調査区  
SK24セクション（南西から）

写真5 第152次



第153次調査区  
中世遺構完掘（西から）



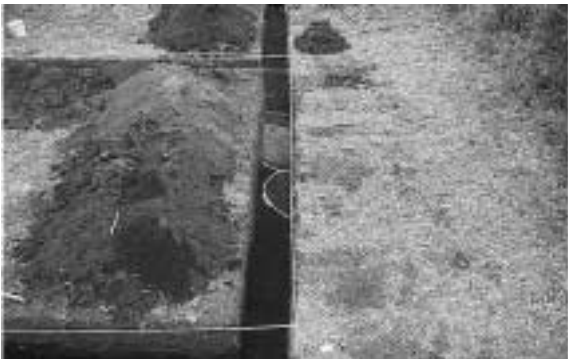
第153次調査区  
東壁セクション（西から）



第154次調査区  
遺構検出状況（北から）



第154次調査区  
遺構検出状況（東から）



第154次調査区  
遺構検出状況（北から）



山王坊遺跡  
第1トレンチ完掘（北から）



山王坊遺跡  
第6トレンチ完掘（東から）

写真6 第153次・第154次・山王坊遺跡

報 告 書 抄 録

ふりがな	とさみなといせきはち
書名	十三湊遺跡
副書名	第151次～第154次発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第355集
編著者名	青森県教育庁文化財保護課埋蔵文化財班
編集機関	青森県教育庁文化財保護課
所在地	〒030-8540 青森県青森市新町二丁目3番1号 TEL017-734-9921(直通)
発行年月日	西暦2003年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とさみなといせき 十三湊遺跡	あおもりけんきたつがるくん しうらむらおおあざじゅうさん 青森県北津軽郡市浦村大字十三	02385	38022	151次		20020603 ～ 20020802	151次 約800m <sup>2</sup>	遺跡の概要把握のための学術調査
				41°01'05"	141°20'02"			
				JGD	JGD			
				(41°01'05")	(141°19'49")			
152～154次		152～154次	約104m <sup>2</sup>					
41°01'36"	141°19'51"							
JGD	JGD							
				(41°01'46")	(141°19'38")			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
十三湊遺跡	集落跡	中世	151次 区画溝(堀)、土塁 墳墓、井戸、土坑 竪穴遺構、柱穴	青磁 白磁 褐釉陶器 瀬戸焼 珠洲焼 瓦質土器 瓷器系陶器 銅製品 鉄製品	・区画溝で囲まれた宗教的空間と墳墓の確認 ・土塁で囲まれた居住域の確認
			152次～154次 区画溝、井戸 土坑、柱穴 畑跡	青磁 白磁 瀬戸焼 珠洲焼 瓷器系陶器 鉄製品	152次 井戸跡の確認 153次 畑跡や溝跡の確認 154次 溝跡の確認

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第355集

## 十三 湊遺跡

発行日 平成15年 3月25日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県教育庁文化財保護課  
〒030-8540 青森市新町二丁目3番1号  
TEL 017-734-9921 FAX 017-734-8280

印刷所 東北印刷工業株式会社  
〒030-0902 青森市合浦一丁目2 - 12  
TEL 017-742-2221 ・ FAX 017-765-1115

---

